

小倉祇園における八坂神社の位置づけ - 町の祭りの中に埋もれた神社の祭り -

山中 さやか
北九州大学文学部人間関係学科

要旨

小倉祇園祭りは八坂神社の例大祭の一つである。しかし、現在の祭りはイベント化し、神事ではなく太鼓が主になり、神社と町の人々の間に距離ができ、祭りにおける八坂神社の地位は低下している。

これまでの小倉祇園祭りに関する先行研究ではおもに祭りをになう人々が中心であったが、本研究では八坂神社側から分析を試みる。本論ではまず、八坂神社と町衆の間に距離ができ、神社の地位が低下した3つの原因について明らかにした。

1つめは「八坂神社の場所」である。八坂神社は当初、城下の鑄物師町に創建された。しかし、環境悪化の理由で昭和9年城内に移っている。城内は周りに民家が少ない。2つめは「小倉祇園の歴史的背景」である。小倉祇園祭りは城主細川忠興が城下町繁栄策の一つとしてはじめたものである。八坂神社も忠興によって創建された。祭りも神社も「お上」によってつくられたものであった。3つめは映画「無法松の一生」による影響である。この映画によって祭りは太鼓中心のものへと変わってきた。

つづいて、同じ小倉でおこなわれる「わっしょい百万夏祭り」と比較し、小倉祇園祭りは神社なしで成り立つか、ということについて考察した。小倉祇園祭りは、神社、つまり「聖なるもの」によって人々は日常から完全に切り離される。しかし「聖なるもの」をもたない「わっしょい」は、人々をひきつける力が弱く現在様々な問題に直面している。

祭りにおける八坂神社の地位は確かに低下したが、祭りに聖性を付加する文化装置として人々に求められるかぎり、神社の役割はなくならないと考えられるのである。

目次

はじめに
第一章 都市人類学における「まつり」について
第一節 都市人類学について
第二節 「祭り」とは
第二章 祇園祭りの歴史
第一節 祇園祭りの起源
第二節 京都祇園祭りと八坂神社
第三章 小倉祇園の歴史的背景
第一節 小倉の歴史
第二節 小倉八坂神社について
第四章 小倉祇園祭り
第一節 小倉祇園祭りの変遷
第二節 小倉祇園祭りの概要
第三節 神事について
考察

はじめに

福岡県3大夏祭の1つである、小倉祇園祭りは毎年7月の第3金、土、日におこなわれる。祇園祭りが近づくと小倉の街のあちこちから太鼓の音がきこえてくる。町内や企業、または有志によって結成された各太鼓のチームが、小倉祇園祭り本番に向けての練習をしているのだ。

小倉祇園祭りは本来八坂神社の例大祭である。しかし現在の小倉祇園祭りは、神事としてよりもイベントとしての性格が強いようだ。



おはらいを受ける太鼓のたたき手

人々は太鼓を打つために祭りに参加する。小倉祇園祭りのハイライトとされているのは、小倉祇園太鼓保存振興会主催の小倉祇園太鼓競演会である。これは、各太鼓チームがステージの上で太鼓を打ち、それを審査員が審査する、というものである。それに対し神社の神事に参加する人はほとんど目立たない。

小倉祇園太鼓に関する先行研究でも「元来は、神社と町内が中心となって盛り上げていく祭りのはずが、次第に距離が生まれ

て、そこに企業が入り込んでいる。」(中野1996)、「八坂神社に目を向ければ、神事の列に企業しか続かなくなり、ついにはそれさえも姿を見せなくなりつつある。八坂神社を取り巻く現状には厳しいものがある。ところが太鼓の競演会は、・・・多くの人が自発的に参加し盛り上がりを見せている。」(中野1996)など、神社と町内の関係は希薄になり、イベントが祭りの中心になっていることが再三指摘されている。もちろん祭りのイベント化は小倉祇園祭りに限ったことではない。しかし、八坂神社側からしてみれば、こうした現状は「とてもおかしなこと」である。

これまでこうした問題について、太鼓に参加する街の人々や保存会側からの研究は多かったが、神社側からの分析はほとんどなかった。そこで本論文では、神社側からの分析をこころみることにした。

まず、人々と神社の間に距離ができてしまった主な原因が「八坂神社の場所」「小倉祇園の歴史的背景」「映画による影響」の3つであるという仮説をたてた。小倉祇園祭りの現状と八坂神社の歴史的背景等を踏まえながら、筆者自身が巫女として神社の祭礼に参加するという、フィールドワークを通して、なぜ小倉祇園祭りにおける八坂神社の地位が低下してしまったのかを明らかにする。さらに、神社の地位が低下しつづけているにもかかわらず、将来的に消えてしまうものではないという点を祭りにおける神社の「聖」的役割と、「祭り」と「イベ

ント」の社会認識的な差異などの分析をもとに考察したい。

第一章 都市人類学における「祭り」について

第一節 都市人類学について

本稿では「小倉祇園祭り」という都市のまつりについて考察する。これは「都市人類学」に分類される。祖父江によれば、文化人類学のなかに都市人類学ということばが登場したのは70年代のはじめである。文化人類学はもともと無文字文化の研究から出発した。やがて文明社会の農村、漁村も研究されるようになり、最近では都市についても調査、研究がおこなわれるようになったのである。これが都市人類学とよばれるようになった(祖父江1979)。

これまで都市の問題を中心としてきた都市社会学と都市人類学の相違点は、前者が、都市の家族、青少年非行などを扱い、統計的、量的な研究が中心であったのに対し、後者は、統計的な資料はあくまでも補助的なものとして、都市文化の「型」の分析が主となる点にある(祖父江1979)。

都市のまつりに関する先行研究のうち小倉祇園に関するものは「都市祭礼における有志チームの発生と機能」(中野1996)、「都市祭礼における流動層」(中野1996)などがある。

第二節 「祭り」とは

まず「祭りとは何であるか」ということ

について整理する。これまで宗教学者や民俗学者、歴史学者、社会学者、人類学者などが祭りについて研究してきた。だが「祭りとは何か」という定義は確定していない。しかしそのなかで、森田は、エドモンド・リーチが提示した図は(図1)祭りについて理論的に考察する際に欠かすことのできない基本的論点を示している、としている(森田1990)。

図1 エドモンド・リーチによる「社会的時間の分節化」の図(Edmund reach 1976)

リーチは「すべての人間社会において大多数の儀式の機会は、一つの社会的範疇と間の境を移ることを仕切る『通過儀礼』である。」とし、人は社会的時間の分節化には儀礼を要求すると述べ、図1でいう「分離の儀礼」と「統合の儀礼」では正反対のことがおこる、としている(Leach1976)。森田は、祭りについて考察する際に、個別の祭りではなく、それらをふくむ体系を一つの全体(構造)として考慮すべきであるとし、リーチが儀礼行動(ritual behavior)を形式性(formality) 乱痴気騒ぎ

(masquerade) 役割転倒(role reversal) に分類した、と述べている(森田 1990)。森田はリーチの祭り論について以下のように解釈している。祭りは社会的時間の分節化という機能を持ち、聖なる時間をつくりだすことによって俗なる日常の時間を区分する。形式性や乱痴気騒ぎは日常から人々を遠ざけ、役割転倒は俗から聖への完全な移行を象徴しているのである(森田 1990)。

これを小倉祇園にあてはめて考えれば、神社による神事が形式性、太鼓をたたくことが乱痴気騒ぎにあたる。祭りにおける神社は、祭りの象徴の1つであり、「聖なるもの」の原点である。祭りの参加者は自らが聖性を帯びたものとなるために、「聖なる時に聖なるところで聖なるもの(神)の前で、聖なる規則にしたがってふるまわなければならない(森田 1990)。」その規則を人々に示すのは古老や神職である。しかし、人々



お神楽を舞う

が従ってきた象徴体系に懐疑を抱くとき、それは再編成する必要にせまられる(森田 1990)。小倉祇園祭りにおける神社の地位も再編成をくりかえしながら存続しているのではないだろうか。

それでは、小倉祇園祭りについてふれる前に、祇園祭りそのものの歴史からみていきたい。

第二章 祇園祭りの歴史

第一節 祇園祭りの起源

祇園祭りとその関連行事は今や全国各地で行われている。たとえば小倉近辺だけでも博多祇園祇園山笠、戸畑祇園大山笠などがあげられる。その起源となるのが京都の八坂神社のものである。京都における祇園祭りの歴史は平安時代にまでさかのぼる。

平安京で悪疫が流行した時、貴族たちはそれを政争に敗れて死んでいったひとたちの怨念によるたたきであると考えた。そこで863年悪霊退散の祭りが皇室の行事としておこなわれた。これを「御霊会(ごりょうえ)」という。後、869年におこなわれた「祇園御霊会」が京都の八坂神社における祇園祭りのはじまりといわれている(米津 1986)。

第二節 京都祇園祭りと八坂神社

祭りを主催する祇園社は876年に天台宗比叡山延暦寺の末社として創建されたといわれている。つまり、祇園御霊会が始まったあとに祇園社は創建されているのである。

ここにはもともと八坂造という氏神があり、賀茂川の洪水や疫病などに悩む庶民が中心となって、厄除けの御霊会をはじめ、やがてその疫神の社を作ったと考えられている（林屋 1969）。すなわち京都祇園は当初から「皇室＝神社の神事」と「町衆の祭り」の2つの側面があったのである。祭りは970年から毎年おこなわれるようになり、998年から山がでるようになったという。そしてこの祇園祭りは町衆の伝統の中に深く根づき、全国に広がっていったといわれている。現在のように「八坂神社」となったのは明治にはいつからである（米山 1986）。

祇園祭における町の人たちと京都八坂神社の関係については「神社は確かに祭礼の中心であるが、またそれを支持する民衆の心の動きによって左右されるという一面もそなえているのである（米山 1986）」とある。このように、現在の京都祇園においても「町衆」と「神社」という祭りをささえる2つの側面は残されている。

つづいて、どのようにして小倉祇園祭りが始められるようになったかをさぐるために、まず簡単に小倉の街の歴史をふりかえる。

第三章 小倉祇園の歴史的背景

第一節 小倉の歴史

16世紀後半、豊臣秀吉の九州平定後、豊前国の企救・田川二郡は毛利勝信に（居城・小倉城）、それ以外の各郡は黒田孝高に（居城・中津）あたえられた。しかし秀吉の没

後、徳川家康と石田三成の対立が激化する。1600年石田側についた毛利勝信は、徳川側の黒田孝高らに不意をつかれ小倉城を攻め取られた。さらに関ヶ原合戦の結果、毛利勝信は改易され土佐の山内に配流され、黒田長政には筑前一国が与えられた（孝高は隠居）。そして毛利・黒田のあとに丹後国宮津から細川忠興が入国し豊後国の国東・速見両郡が追加された。

忠興はまず中津城に入城し、小倉城には弟の興元を配置した。しかしその後筑前国にうつった黒田と年貢の引継ぎでもめ、さらに関門海峡を隔ててわずか700メートルのところを領土を移した毛利氏に対する防御のために居城を交通の要所である小倉城にうつした。小倉城は当時規模が小さかったので、忠興は1602年の正月より築城工事を始め同年11月には移り住んでいる。小倉に移ってくると、忠興は小倉城周辺を開発整備した。また、城下町を繁栄させるために、諸国から商人や工人を集めたり、京都の八坂神社を勧請して祇園祭りを始めた。細川家は1620年には小倉から肥後54万石の大名に出世し熊本にうつり、小倉城には小笠原忠政が入城した。しかし、祇園祭りはそのままひきつがれ、現在に至っている（米津 1979）。

ここで確認しておきたいのは、小倉祇園祭りがもともと小倉の街にあったお祭りではなく、細川忠興による行政施策の1つとしておこなわれるようになったものだ、ということである。すなわち町衆の中から生

まれたものではなく「お上」からあたえられた祭りだったのだ。

それではこの「祇園社」として創建された、現在の小倉八坂神社はどのような神社なのだろうか。

第二節 小倉八坂神社について

「小倉祇園の社」とされている小倉八坂神社は、細川忠興が小倉城に移り住んでから15年後の1617年（元和3年）に城下町繁栄のために「祇園社」として城下の鑄物師に創建された。これはもともとと不動山と片野村にあった祇園の小祠をそれぞれ、祇園社の南殿、北殿に移したものである。祇園社は小倉藩の総鎮守とされ、氏子はいなかった。初代の南殿の宮司に高山孫大夫定直、北殿の宮司に川江左衛門種茂が任命された。その後明治に入って宮司家は高山家一家となった（現在、高山定基宮司）（米津 1990）。

祇園社は明治維新後、八坂神社と改名さ

を鑄物師から小倉城の隣（小倉北区内）にうつした。祇園社を八坂神社と改名したのは京都の祇園社（現在の八坂神社）が八坂神社と改名したのにならったためだと言われている。『到津八幡小史』によると、祇園社は到津八幡神社（小倉北区）の末社であったとされているが詳細は不明である。祭神は須佐之男命、大国主命、他10柱である（米津 1995）。

八坂神社の年中行事は、例大祭である祇園祭りのほか、1月は、1日の歳旦祭、9日のおくべ祭、10日の十日戎、4月第一土・日の春祭、7月31日・8月1日の夏越祭、10月第3土・日の秋祭などがある。八坂神社は北九州で最も大きな神社の1つで、お正月や七五三の時期は広い境内は参拝客でいっぱいになり、毎年マスコミが取材に来る。八坂神社を訪れる参拝客は、小倉北区からだけでなく、小倉南区や戸畑、八幡など、北九州市全域とその近隣の市町村または県外からと広範囲にわたっており、観光客も多く訪れる。また、企業の参拝もおおい。昨年、高山宮司によって設計された楼門が完成し、参拝客や通行人の目をひいている。

第四章 小倉祇園祭り

この章では小倉祇園祭りの歴史の変遷、現在の街での行事、現在の神事の順にのべる。

第一節 小倉祇園祭りの変遷



御神酒をいただく

れ、昭和9年に環境悪化を理由にして社殿

小倉祇園祭りは小倉八坂神社の例大祭で、1618年(元和4年)に始まったといわれている。先にも述べたように、丹後国からきた細川忠興が小倉城下町の繁栄策の一つとして京都の八坂神社を勧請し、小倉城下に八坂神社(当時祇園社)を創建し、祇園祭りがはじまったのである。当時の祇園は「...神事としての性格が強く、また神幸にしても簡素な神山(タケで四本の柱を立て、サカキでこしらえた祠を四人で担ぐ程度のもので、現在の神山は白木の神殿造り)が城下を回っていたようである。」(米津 1990)とされている。しだいに祭りは豪華になっていき、各町内は歌舞伎を題材にした人形引車や踊り舞台の山車をつくり、踊り子や浄瑠璃、三味線、太鼓の囃子なども加わって、街を練り歩いたようである。このように街を練りまわることから、小倉祇園は「まわり祇園」と言われた。(図2)しかし、明治の終わり頃より、飾り山車や踊り子など

がなくなり、豪華だった山車は、両面打ちの太鼓の山車になって、次第に町内が神幸行列から外れだし、「まわり祇園」の形式は消えていった(米津 1986)。

さらに 1943 年に上映された映画「無法松の一生」で小倉祇園は全国的に知られるようになった。それ以来祭りは太鼓中心のものへと様変していく。祭りは昔は一定ではなかったが、八坂神社創建 300 年以降に 7 月 10、11 日におこなわれるようになり、その後 12 日までおこなわれるようになった(米津 1995)。そして 1987 年(昭和 62 年)から休日にあわせて 7 月の第三金、土、日になり、現在に至っている。この開催日の変遷からも祇園祭りがイベント化していく様子がみとれる。

また、昭和 22 年に小倉祇園太鼓保存会が発足、昭和 41 年に小倉祇園太鼓保存振興会となり、現在の小倉祇園祭りの中心的役割を担っている。昭和 44 年に「女人禁制」

図2 御神幸行列の図(「八坂氏春秋」第2号より)

がはじめて解かれ、現在では女性の参加者も多い。祭り期間中は八坂神社の神事以外に小倉の繁華街を中心に様々なイベントがおこなわれ、たいへんな賑わいをみせている。

第二節 小倉祇園祭りの概要

先に述べたように現在の小倉祇園祭りは7月の第3金、土、日を中心であるが、それ以前に八坂神社でおこなわれる神事や、小倉祇園太鼓前夜祭、小倉祇園太鼓競演大会などがある。今年の小倉祇園太鼓の神事及び行事を時間・行事(神事)名・場所・主催者の順に表1にあげる(表1)。まず、行事について説明する。小倉祇園の前夜から、まちのあちこちで太鼓が叩かれており、小倉の街を歩いていて山車とすれ違うのをさける方が難しい。小倉の歓楽街である鍛

冶町・堺町での前夜祭は、会場にステージがもうけられ、2名の司会者によってイベントが進行していく。もちろん太鼓も披露された。

一連の行事のなかで一番もりあがる小倉祇園太鼓競演大会では、打法や服装などが審査対象とされており、ほとんどのチームは、この大会に向けて熱心に練習する。ある企業のチームの練習を見学したが、私語をする人が見当たらないほど真剣そのもので、会社をあげて全力投球していた。祭りの実質的な中心組織はこの大会を主催する小倉祇園太鼓保存振興会といえる。しかし一方で服装などを審査対象にすることに反感をもち、敢えて競演会に出場しないチームもある。そのようなチームは自分たちの太鼓打法にこだわりをもっている。また、

表1 小倉祇園における行事神事一覧表

日付	時間	行事名	場所	主催者
7月11日	9時から	御潮井取り	八坂神社	八坂神社
7月17日	18時から21時	第16回「小倉祇園太鼓前夜祭」	九州厚生年金会館	小倉祇園太鼓保存振興会
	19時から22時	第16回鍛冶町・堺町祇園夏祭り祭広場前夜祭	鍛冶町・堺町祇園夏祭り広場前夜祭	堺町公園鍛冶町・堺町を明るくする会
7月18日	13時から15時	御神幸	八坂神社から室町、魚町を通り馬借	八坂神社
	19時から22時	第16回鍛冶町・堺町祇園夏祭り広場	鍛冶町・堺町周辺	鍛冶町・堺町を明るくする会
	19時から21時	第9回西小倉太鼓広場	JR西小倉駅前広場	西小倉校区自治連合会
7月19日	9時から	御遷行・例大祭	馬借から八坂神社	八坂神社
	13時から16時	第50回小倉祇園太鼓競演大会	小倉城大手門前	小倉祇園太鼓保存振興会
7月20日		大祭	八坂神社	八坂神社
	13時から16時	第9回小倉祇園据え太鼓競演大会	小倉城大手門前	小倉祇園太鼓保存振興会
	13時から17時	第11回ちゅうぎん・みかけ通りおまつり広場	ちゅうぎんみかけ通り	ちゅうぎん・みかけ通りおまつり広場実行委員会
	18時から21時	第23回太鼓広場	ちゅうぎん・みかけ通り	小倉祇園太鼓保存振興会

「小倉祇園太鼓行事一覧表」をもとに作成

競演会に出たくても、参加できないチームもある。彼らが暴走族に所属しているため、保存振興会が参加を認めないのである。

最終日の「太鼓広場」は各太鼓チームが太鼓を叩きながら通りを練りあるく。ただ太鼓を叩くだけではなく、仮装している人もいれば、チーム全員で髪をカラフルに染めていたりしていて、「祇園太鼓パレード」といったところである。見物人も非常におおい。

これらは神事とは離れた祭りであり、「乱痴気騒ぎ」にあたる部分である。

第三節 神事について

祇園祭りに先立って、5月の中旬から敷地被いがおこなわれる。これは神様を迎える前に土地を清めておこう、というものである。

それがすんで祇園祭りまえになると、神社はますます準備で忙しくなる。たとえば、男性は竹を切ってきて、町内にくばる。竹は注連縄をはるためのもので、本来ならば各町内で準備する。しかし、現在では竹が手に入りにくいので神社がかわって準備しているのだという。また、行列のための衣装をそろえたりもしなければならない。衣装揃えなどの裏方的な仕事は事務長と巫女が中心となっている。御旅所で舞う、巫女舞の練習は仕事の合間を見ておこなわれた。

祇園祭りのときのお供え物は通常より豪華になり品数もおおくなる。普段は酒、塩、米、昆布などの乾物、野菜と果物がそ

れぞれ三方1台ぶんなのだが、小倉祇園では果物だけでも何種類もあり、1種類のものが1台の三方に盛られていく。ほかにも生きたうなぎや巨大なすいか、しょうゆなど、バラエティーにとんでいる。

7月にはいつてからの神事は、御潮井取、第3金曜日の祇園祭り初日に御神幸祭、2日目に還幸祭、ひきつづき例大祭がとりおこなわれ、最終日に大祭となっている。以下、順を追ってみていくことにする。

お潮井取り

7月11日、八坂神社本殿横に祭壇が組まれ、お潮井取の神事がおこなわれた。この神事は、伝統的なものではなく、せいぜいここ10年くらいに始められたものであるという。博多の祭りを真似て、八坂神社でも行うようになったという。昔の資料にこの神事はでてこない。

今年の予定表では、祭典は7時からとされていたが、実際は9時からおこなわれた。この日は雨で、ぬれながら、祭典がとりおこなわれた。以前街の人々は、このとき自分たちの町内の山車をひいて神社へ来ていたが近年では誰も来ないようになった。そのころは働いている人たちも参加できるように早朝に神事をおこなっていたという。このことについて神社の関係者ののはなしをきくと「朝早くやっていたのも、いいのか、悪いのか……。今は街の人たちがこの神事があつてことを知らないのかも」ということだった。

今年この神事に参加したのは、祭典を執り行った八坂神社宮司を始め神官4人と八坂神社総代の毛利氏と私、それと神官に傘をさしかけていた八坂神社のアルバイトだけだった。

御神幸祭

祇園祭り初日は、正午より八坂神社本殿において祭典を執り行い、13時に御神幸行列出発という予定です。神幸祭とは神のいでましの祭典である。小倉祇園の神幸祭では神霊が境内外のお旅所に渡御するものである。

午前中から社務所は多忙をきわめる。行列のための衣装がやぶれていたり、持参するはずの足袋を忘れていたり、御弁当を配ったりという具合である。

祭典が無事に済み、ようやく御神幸の出発である。神幸行列の基本型は図のとおりである(図3)。行列は神社を出発してから



人力車に乗る巫女(右が筆者)

図3 御神幸略図(八坂神社作成)

田町、室町、京町、魚町をとおり、モノレール下の大通りを歩き、途中で折り返して太鼓広場の御旅所にむかう。

神官や巫女など神社関係者以外で御神幸行列に加わったのは、修験者のひとたちや、企業からの代理人たちなどである。また、神輿をひいて歩いたのは小倉工業高校の生徒たちであった。ほかにも大学生のアルバイトなどがいた。山車をひいて行列に参加した町内は八百屋西魚町、米町一であった。

今年の御神幸行列は踊り舞台の山車や人力車が加わり、去年よりもにぎやかなものとなった。踊り舞台の上では八坂神社神官の波多野安彦氏とその甥による舞が舞われていた。私は今年、人力車にのって御神幸行列に参加した。行列神社を出ると室町をぬけ紫川を渡り魚町を通過して、お旅所である、太鼓広場に向かう。数は少ないが、御神輿に手を合わせて拜む人や巫女がもっ

ている三方のなかにお賽銭をいれるひともいる。

途中、アイスクリームがさしいれられ、高校生達は御神輿をひきながらたべていた。行列は信号によってなんども分断されてしまう。小倉で一番の繁華街を通り抜けていくので、車も人も多く、時には走って道路を横断したりしなければならぬ。馬も 2 頭いるのでなかなかペース配分がむずかしい。袴を着た交通整理係りは走り回って、汗だくで、顔も真っ赤になっている。やっとの思いでお旅所につく。

そしてそこで祭典があり、巫女舞いを舞った。祭典が終わると留守番係を残して、神社へもどった。今年の行列の参加人数は総勢約 130 人ということだった。(資料 1)

御還幸祭、例大祭

御還幸とは御神幸の逆で神様がお旅所か

ら神社へかえることをいう。御旅所での祭典がすむと神社にむかって行列が出発する。御還幸は御神幸のようにおおまわりせず神社へもどる。

神社に到着後、本殿で祭典が執りおこなわれ、引き続き例大祭がある。

この日から次の日にかけて、日中は奉納打ちにおとづれた山車の御祓いで境内はごったがえす。60 台以上の山車が奉納打ちにおとづれ、御祓いをうける。参道には御祓いの順番を待つ山車の長い列ができる。境内では競いあうようにして太鼓がたたかれることがある。そして御祓いをうけた山車には宮司によって「奉納 祇園太鼓打」とかかれた木札が授与される。木札はそれぞれの山車に飾りつけられる。町の人「これ(木札)がないと格好がつかん。」という。

八坂神社の職員たちは、ご飯もゆっくり食べる暇はなく、隙をみては交代でたべる。夕方になると落ち着いてきて、時間的にも精神的にも余裕ができてくる。

この日の夜は、境内(本殿正面)で神楽舞いが披露された。神楽は八坂神社神官の波多野氏が中心となっていて、波多野氏の一声で舞がはじまる。波多野氏は八坂神社の神官であり、責任役員である。古来的存在であり、人望もあつい。舞手はもと八坂神社の学生アルバイト 4 人で、ことしは波多野氏の「一声」が少しおそかったため、酒がまわりすぎていてふらふらしながら舞っている人もいた。この舞の後、波多野氏による獅子舞も披露された。この時は神社

資料 1 御神幸行列の様子

(朝日新聞 1997 7 19)

関係者も参拝客も盛り上がった。

神事は毎年確実におこなわれている。その内容は細かいところで毎年違っている。

第五章 考察

まず、「はじめに」であげた、神社と町内との関係が希薄化した理由についての、3つの仮説について検証していきたい。

1つめの仮説「八坂神社の場所」についてみる。第3章で述べたように、八坂神社は当初鑄物師町に創建されたが、環境悪化のため昭和にはいつてから現在の小倉城内にうつっている。もと社殿のあった鑄物師町は城下町で周りに民家もたくさんある。しかし現在社殿のある小倉城内は、まわりを小倉城、北九州市庁舎、小倉北区役所、玉屋（百貨店）、ダイエー（スーパー）などに囲まれており民家は少ない。「...『まわり祇園』が姿を消すのは、八坂神社が鑄物師町から城内に移ったころだったであろうか。」（米津 1986）とある。こういった環境であるために、町内との関わりも少なくなっていたのではないかと考えられるのである。

2つめにあげたのは「小倉祇園の歴史的背景」である。もともと小倉祇園は小倉にあった祭りではなく京都の祇園をもってきたものであり、その京都の祇園が町衆の祭りであったことを考えると、神社が祭りの中心となり得ないのは当然のことであるのかもしれない。しかしそれとは別に、小倉特有の原因があるとおもわれる。すでに述

べたように、小倉の八坂神社は、丹後国から来た細川忠興によって城下町繁栄策の1つとして創建されている。藩主忠興によって創建された神社なので、町民の氏子がおらず、社殿の修繕費等はすべて忠興が出していた。つまりもともと町内との関係はそれほど密接なものではなかったのだ。とくに廃藩がおこなわれた明治維新以降、八坂神社はその経済的背景を失ってしまうことにもなった。

3つめは映画「無法松の一生」による影響である。これによって小倉祇園祭りは全国に知られるようになり、祭りは太鼓中心のものへと変わっていった。また小倉の都市化によって祭りをになう人々も変わってきた。町の人だけでなく企業が参加するようになった。こうして観光化、イベント化していったのではないかと考える。まちの人々は新しいものを受け入れ、自分たちのものにしていった。それに対し神社はまちの人たちのように祭りのイベント化を受け入れることができなかったのではないか。そこに小倉祇園祭りから外れていき、町内との距離ができてしまった根本的な原因があると考えられる。八坂神社がこれまでまったく振興をうけいれてこなかったわけではない。実際に祭りの日にちも変わっているし、女性や企業もうけいれている。しかし、八坂神社側からすれば小倉祇園を「神事としてのまつり」と考えるのは譲れない部分である。八坂神社がまもらなければならないものは、小倉祇園まつりを「神様の

ためのもの」とする立場であり、これは絶対的なものなのである。

では、将来的に小倉祇園祭りが完全にイベント化し神社が祭りから姿を消してしまうことがあるだろうか。もし、小倉祇園がただ太鼓を叩くだけの祭りであったとしたら、それは単なるイベントとかわらない。そこで簡単に同じ小倉で8月におこなわれている、「わっしょい百万夏祭り」と比べてみたい。

「わっしょい百万夏祭り」(以下「わっしょい」とは、行政主体で始められた祭りであり、小倉祇園太鼓、戸畑祇園大山笠、黒崎祇園山笠、若松五平太ばやし、大里電照山笠の北九州市にある代表的な5つの祭りの山車が一同に介するものである。昨年で10回目を迎えたが、さまざまな問題に直面しており、「本来の祭りの日に、みに来る人が減る」、「予算の都合がつかない」、「北九州市の祭りなのに、祭り会場が小倉だけというのはおかしい」等の批判がおきている。そして、戸畑祇園大山笠のように「わっしょい」に参加しなくなったものもある。

小倉祇園まつりとこの「わっしょい」の違いはいったい何だろうか。

小倉祇園祭りにあって「わっしょい」に欠けているのは「聖なるもの」の存在である。敷地被いにはじまる御神幸、御還幸などの神事や、祭り参加者が神社で御被いを受けることによって、小倉祇園太鼓祭りや、祭り参加者はある種の聖性をおびたものと

なる。八坂神社はこの意味で人々を日常から切り離す装置としてはたらいっている。すなわち「聖なるもの」を持たない「わっしょい」はあくまでもイベントであり、一方、近年イベント化が進んでいるといわれているものの祇園太鼓は、祭りとしての「形式」を保っているのである。

小倉祇園保存振興会のなかには、「八坂神社から離れよう」という意見もでていう。また街の人たちからは「株式会社八坂神社」という陰口がきこえる。人々は行列に参加することをやめ、太鼓を叩くことだけに魅力を感じ、それが主なものとなってしまった。しかし、その一方で山車の御被いはほとんどのチームがうけ、授与された木札を自分たちの山車にかざりつける。小倉祇園太鼓競演会に出場することを許されなかったチームも神社にきて御被いを受ける。敷地被いをうけるところもおおい。少人数ではあるが、行列の御神輿に手をあわせ、拝む人もみかけた。神社の存在はまだまだ必要とされているのである。

以上、この論文では、小倉祇園における八坂神社の地位が低下した原因を分析してきたが、一方で人々はやはりどこかで「聖なるもの」を求めていることも明らかにされた。おそらく小倉祇園が「祭り」である限り、八坂神社の存在が消えることはないであろう。

謝辞

「小倉祇園祭りを神社側からみる」ということができたのは、約4年間、わたしをうけいれ数々の貴重な経験をさせてくださった、高山定基宮司はじめ、八坂神社の皆様のおかげであり、そのご厚意に深く感謝いたします。

また、フィールドワークというものを私に教え、たくさんの知識とアドバイス、そして諸先輩方のお話をうかがう機会を与えてくださった成城大学大学院に所属されている中野紀和様にも、心から感謝の意を表したいとおもいます。

調査するにあたっては、小倉祇園太鼓保存振興会のみなさまには、たくさんの資料をいただきました。住吉町、室町二・三丁

目、女無法松の会の方々からは太鼓を教わりました。

そのほか、多くの方からお話をきかせていただいたことを忘れることはできません。参考文献等を提供してくださった佐藤真人先生、重信幸彦先生にも御礼申し上げます。

そして最後に、なによりもこの論文のテーマ設定から書き終えるまでお正月も返上し、夜を徹して指導してくださった竹川大介先生に、心より御礼、申し上げたいとおもいます。



おはらいを受ける暴走族チーム

参考文献

- 1997.7.19 「朝日新聞」朝刊 13 版
- 大山宏 1984 『到津八幡神社小史』 到津八幡神社
- 小田富士雄、米津三郎他 1979 『北九州の歴史』 葦書房
- 北九州市 1983 『北九州市史 五市合併以後』 北九州市史編さん委員会
1986 『北九州市史 近代・現代』 北九州市史編さん委員会
1988 『北九州市史 民俗』 北九州市史編さん委員
- 國學院大学日本文化研究所 1994 『神道事典』
- 小倉祇園太鼓保存振興会 1997 平成 9 年度 “小倉祇園太鼓” 行事一覧表
- 沢村敏雄 1979 『北九州市神社誌』 北九州史跡同好会
- 祖父江孝男 1979 『文化人類学入門』 中公新書
- 中野紀和 1996 「都市祭礼における流動層 小倉祇園太鼓を事例として」 『日本民俗学』
205
1996 「都市祭礼における有志チームの発生と機能」 『生活學論叢』
- 林屋辰三郎 1969 『歴史・京都・芸能』
- 森田三郎 1990 『祭りの文化人類学』 世界思想社
- 八坂神社 「八坂神社例大祭次第書」
八坂神社パンフレット
- 米津三郎 1986 『八坂春秋』 第 1 号八坂神社
1986 『八坂春秋』 第 2 号八坂神社
1987 『八坂春秋』 第 3 号八坂神社
1987 『八坂春秋』 第 4 号八坂神社
1990 『八坂春秋』 第 9 号八坂神社
1990 『読む絵巻き小倉』 海鳥社
1992 『北九州の百万年』 海鳥社
1995 『小倉藩史余滴』 海鳥社
- 米山俊直 1974 『祇園祭』 中公新書
1986 『祇園祭』 N H K ブックス
- Leach, Edmond R 1961 『人類学再考』 (青木保・井上兼行訳 1974 思索社)
1976 『文化とコミュニケーション』 (青木保・宮坂敬造訳 1981 紀伊国屋書店)